

まちづくりを巡る排他性に関する心理要因分析

愛媛大学 学生会員 ○野添愛美 愛媛大学 非会員 吉岡康介 愛媛大学 正会員 白柳洋俊

1. 背景と目的

人口減少や高齢化に伴う地域の衰退が懸念されている中、全国各地で移住の促進に向けた施策が展開されている¹⁾。地域の存立を支えるため、移住者は移住先の地域住民とともに主体的にまちづくり活動に取り組むことが望まれるが、地域住民が移住者のまちづくり活動への参加を受け入れない事例も見受けられる。本稿では、こうした他者の参加を受け入れない態度を「排他性」と呼称し、まちづくりにおける地域住民の主体的な参加に付随する排他性の形成とその緩和に関する心理要因を分析する。

既存研究では、居住年数の長さは、移住者への排他性を促進すること²⁾や、居住地域に対しての独占的な感覚である「所有意識」を介して、排他性を促進することが明らかにされている。一方で、排他性を緩和させる要因として、「地域愛着」とスポーツやボランティア活動など地域外の人とつながる「橋渡し型の活動への参加」が挙げられる。地域愛着は、それらが高まるほど排他性が緩和されることが示されており³⁾、その醸成には居住年数の長さが影響を与えることも明らかとなっている⁴⁾。さらに、橋渡し型の活動への参加は、地域と異なる集団とのネットワークを構築することから、外部志向的であるため、排他性及び所有意識を緩和させると考えられる。

そこで本研究では、第1に、居住年数が長いほど排他性が促進する、第2に、居住年数の長さが所有意識を醸成し、排他性を促進させる、第3に、居住年数の長さは地域愛着を醸成し、排他性を緩和させる、第4に橋渡し型の活動への参加は、排他性及び所有意識を緩和させるとの心理構造を仮定し、同仮説をアンケート調査に基づき検証する。

2. 方法

本研究では、愛媛県喜多郡内子町八日市地区付近を調査対象地域とし、調査対象地域に居住する616世帯を対象にアンケート調査票を配布した。アンケートでは、「所有意識」、「地域愛着」、「排他性（逆転項目）」について7件法にて回答を要請した。その他「居住歴」、「橋渡し型の活動への参加」についても回答を求めた。表-1に設定した質問項目を示す。アンケート票の有効回答部数は289部であった。

表 1 アンケート調査票の質問項目

項目	質問内容	平均値	標準偏差
所有意識	内子は、内子出身の住民のものだと思う。	2.96	1.63
地域愛着 ($\alpha=0.94$)	あなたは、内子を大切だと思いますか？	5.75	1.16
	あなたは、内子に自分の居場所があると思いますか？		
	あなたは、内子にずっと住み続けたいと思いますか？		
	あなたは、内子に愛着を感じていますか？		
排他性 (逆転項目) ($\alpha=0.84$)	あなたは、内子が自分のまちという感じがしますか？	1.90	1.18
	様々な地域から新しい居住者が集まれば、内子はもっと魅力的になると思う。		
	新しい居住者は内子に貢献すると思う。		
居住年数(年)	内子に新しい居住者が来たら、ありがたいと思う。	40.54	21.75
	あなたは現在住んでいる地区に、これまで通算何年住んでいますか？	参加	不参加
橋渡し	スポーツ、ボランティア活動、商工会等の活動に関わっていますか？	116人	173人

3. 結果と考察

各質問項目の内的整合性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出した結果を表-1に示す。十分な信頼性が認められたことにより、本研究では所有意識、地域愛着及び排他性を構成する質問項目の平均値を用い、共分散構造分析を実施した。その結果を図-1に示す。第1に、居住年数と排他性の関係については、推定値が正に有意であるとの結果が得られた。これは居住年数が長くなるほど排他性が促進することを示しており、仮説を支持する結果となった。第2に、所有意識と居住年数及び排他性の関係については、居住年数と所有意識の関係は推定値が正に有意であるとの結果が得られた。一方で、所有意識は排他性に対して、有意な影響を及ぼすとの結果を得るには至らなかった。これらは、居住年数が長くなるほど、町に対する所有意識は高まるが排他性には影響を及ぼさないことを示しており、仮説を一部支持するものとなった。第3に、居住年数と地域愛着については、推定値が正に有意であり、さらに地域愛着と排他性の関係は負に有意となった。これは、居住年数が長くなるほど地域愛着を醸成し、排他性を緩和させることを意味しており、仮説を支持する結果が得られた。第4に、橋渡し型の活動への参加は所有意識には有意な影響は見られなかったが、排他性との関係は負に有意となった。これは、橋渡し型の活動への参加は、排他性のみ緩和させることを示しており、仮説を一部支持する結果となった。

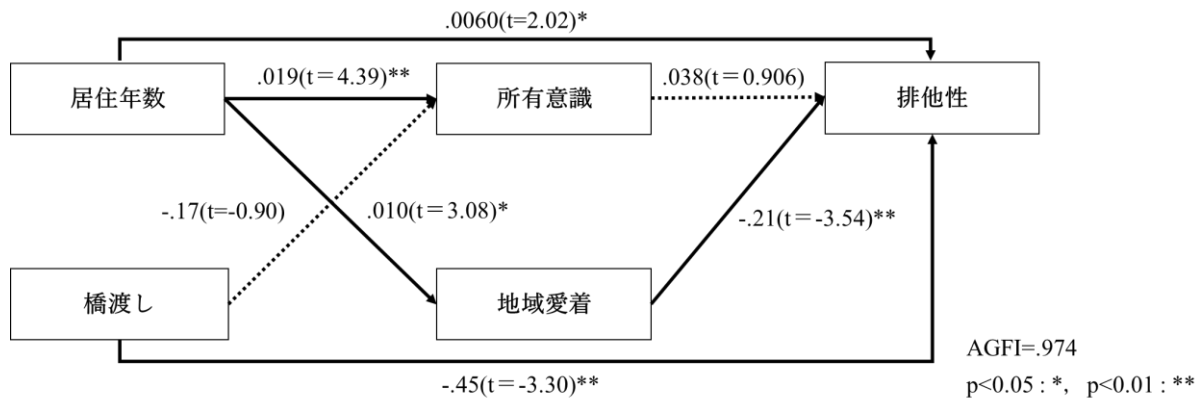


図-1 排他性に関する共分散構造分析結果

4. 結論

本研究では、まちづくりを巡る排他性に関する心理要因について分析をした結果、居住年数の長さは排他性を促進する一方で、地域愛着を醸成し、排他性を緩和させる側面を持つことが示された。さらに橋渡し型の活動に参加することで排他性が緩和することも明らかとなった。以上を踏まえると、居住年数による排他性の醸成は、対処できないものであるが、スポーツやボランティア活動などによる地域外の人とのコミュニケーション施策を行うことで、移住者に対しての排他性を緩和させることが期待される。

5. 参考文献

- 1) 後藤翔一郎：移住者と地元住民の「共創」に関する研究-地方創生を「移住ブーム」ではなく「異文化」・「共同性」から考える-, 人工知能学会第二種研究会資料市民共創知研究会, SIG-CCI-002-16.
- 2) Elias, N., and Scotson, J. L.: The established and the outsiders. A sociological enquiry into community problems. London: Sage, 1965.
- 3) Toruńczyk-Ruiz and Martinović: The bright and dark sides of length of residence in the neighbourhood: Consequences for local participation and openness to newcomers, *Journal of Environmental Psychology*, 2020.
- 4) 鈴木春菜, 藤井聡: 地域愛着が地域への協力的行動に及ぼす影響に関する研究, 土木計画学研究・論文集 Vol.25 no.2, 2008.